

海闊天空

——寺本婉雅を通して見た近代日本と「喇嘛教」^{ラマ}

北海道大学 高本康子



1、はじめに

近代日本人は「大陸」と通称される広大な領域において、「喇嘛教」すなわちチベット仏教と様々な接触をしてきた。

寺本婉雅（1872～1940）はその中で、「入蔵者」つまり、鎖国時代のチベットに入った日本人、「喇嘛教」情報の専門家の一人として、広く活動した僧侶である。彼が属したのは、明治初期に「喇嘛教」との接触のさきがけとなった真宗大谷派（東本願寺）であり、1897（明治30）年、チベット大蔵経を目指して、日本を発った若い仏教者たちの1人であった。その後1899（明治32）年、チベット領域へ日本人として初

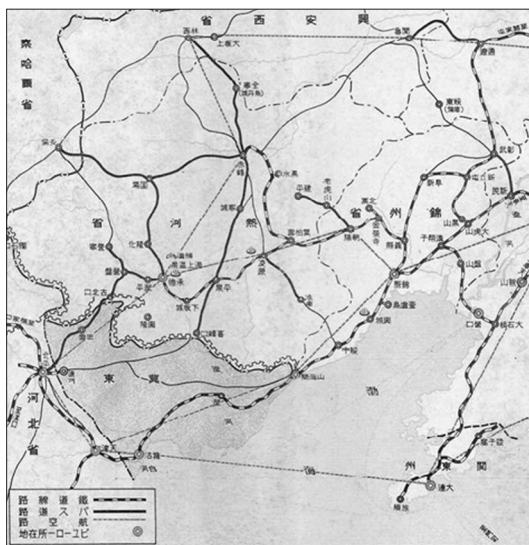
めて到達、更に1900（明治33）年、北京においてチベット大蔵経を入手し、日本へ将来した。その上、彼は「喇嘛教」当局と良好な関係を持つことに成功しており、それによって日本・チベット交流史上画期をなすいくつかの出来事において、重要な役割を果たす。すなわち、1901年の雍和宮活仏の日本訪問であり、また中国五台山におけるダライ・ラマ13世と大谷尊由の会談である。前者は、広く一般の日本人を巻き込んだものとしては日本初のチベット・ブームを巻き起こし、チベットという土地、「喇嘛教」という宗教の存在が認知される最初の契機となった。後者は、日本仏教を代表する立場にある人物が、ダライ・ラマと会見した、その最初の例となった。日本への

帰国後は、京都帝国大学と大谷大学において教鞭を執る一方で、個人的にも若い世代の教育にあたり、その中の何人かは後述するように、「大陸」の現場において、日本人の対「喇嘛教」活動の中核的役割を担う人材となった。寺本を知る人々が、上述のような彼の一連の経歴を、「大陸」での活躍、というように形容していることに注目される（横地祥原『風馬の誘い』勁草書房、1989年、8頁）。「チベット」「モンゴル」「支那」ではなく「大陸」という言葉が使用されていることに寺本の活動の幅広さの一端が見て取れると筆者は考える。

しかし現在までの、寺本に関する記述においてはいずれも、彼のチベット滞在と、チベット大蔵経を将来した経緯、お

よびダライ・ラマ13世（1876（1933）と浄土真宗本願寺派宗主大谷光瑞（1876（1948）との交渉における仲介をした詳細に、研究関心が限定される傾向にあったと言わざるを得ない（*）。従来、寺本の事績が言及されるのが主に、チベット研究と呼ばれる分野であり、また彼の事績に関して参照可能な資料が、弟子の横地祥原が編集した『蔵蒙旅日記』（芙蓉書房、1974年）以外所在不明であったことからこれは当然の結果とも言える。

しかし最近、寺本の個人的事情を如実に反映していると考えられる品々、すなわち日記、ノート類、書簡、写真などの所在が一部ではあるが明らかになりつつある。その最初のもので、2013年度から整理分析作業が開始された大谷大学所管資料（*）であり、次いで2014年には、寺本婉雅の孫に当たる鎌倉市在住寺本正氏所蔵の資料（*）が、筆者に依託された。これらは、現在までの寺本に対して持たれてきた典型的な認識、すなわち僧侶というよりは政治的なチベット工作に深く関わった人物というような寺本像とは全く異なる、寺本の人物像を



熱河省・承徳の位置関係
 ジャパン・ツーリスト・ビューロー編『熱河』巻末所収
 (ジャパン・ツーリスト・ビューロー、1937年)

浮かび上がらせるものである。本稿はこれら新出資料の整理分析結果をふまえ、以下寺本の事績を見直しつつ、日本人と「喇嘛教」の近代における往来を振り返ろうとするものである。

2、「入蔵熱」

明治初年の日本において「喇嘛教」に最も注意を向けていたと言えるのは、先述したように、真宗大谷派であった。明治維新を迎え「文明」の宗教、キリスト教に対峙するための連帯の相手に擬された一つが「喇嘛教」であった。しかしこ

の時の関心はあくまで、北京を中心とする「喇嘛教」世界に向けられたもので、チベット本地を対象とするものではなかった（*V）。

明治20年代になると、「喇嘛教」には、別の視点から注目がなされることとなった。「大乘非仏説」である。ヨーロッパにおいては、インドその他で得られたパーリ語仏典によって、上座部仏教の研究が展開された結果、大乘仏教は釈迦の肉声に遠い、不純物の多分に混じり込んだ仏教という見方が形成されつつあった (Lopez, *Prisoners of Shangri-La: Tibetan Buddhism and the West*, Chianan University of Chicago Press, 1998, p. 35)。大乘仏教である日本仏教がそのような評価に相對していくための可能性の一つが「喇嘛教」に見いだされようとしていた。それがチベット大蔵経であった。この未知の經典の集成の中に大乘仏教、そして日本仏教の存立の基礎となるものを探るといふ目的で若い世代の僧侶がチベットを目指した。これがのちに「入蔵熱」と呼ばれる（*V）。

同時に欧米では世界各地の地理的調査が進められていた。未調査の地域は「地図上の空白」と呼ばれ、チベットはその最大のものであった。しかしチベッ

トはいわゆる「鎖国」の状態にあった。

チベット人は外国人の接近を忌避しており、それが各国の調査隊の行動を阻んでいた。相次ぐ接近失敗は、逐一日本にも伝えられていた。日本においても、そのような調査いわゆる「探検」への関心は急速に高まっていた。福島安正(1852~1919)のシベリア横断(1892~1893年)および郡司成忠(1860~1924)の千島探検(1893年)は、その白熱を象徴する出来事であった。このような状況の中で、若い仏教者たちのチベット行きも「探検」として語られるようになっていく。仏典の探索だけではなく、アジアの「探検」はアジアの間である日本人が果たすべきものであるとされるようになる(*.vi.)。「喇嘛教」は、当時の日本人仏教者にとって、このように二重に意義づけられるものとなった(*.vii.)。

寺本もまたこのチベット大蔵経への関心を強烈に共有する1人であった。しかも日本人僧が遂に念願のチベットの地を踏んだ時、彼はその困難かつ希有な経験をし得た2人のうちの1人となった。1897(明治30)年、寺本は日本を立ち、その2年後1899(明治32)年宗派を同じくする能海寛(1886~)(.viii.)

とともにチベット領域へ日本人として初めて到達、更に1900(明治33)年、北京においてチベット大蔵経を入手し日本へ将来することに成功する。

3、ダライ・ラマ、パンチェン・ラマとの接触

日本の仏教者が目指したチベット大蔵経の入手は、寺本が1900(明治33)年北京において、また日本人初のチベット旅行記を出版したことで知られる河口慧海(1866~1945)もチベットからそれぞれ将来に成功したが、これら十全に果たされるには1923(大正12)年の、西本願寺僧侶多田等観(1890~1967)(.ix.)の帰国を待たねばならなかった。この多田をチベットに送ったのが、浄土真宗本願寺派(西本願寺)第22代宗主大谷光瑞であった。

すでに大谷光瑞は1902(明治35)年から、後に「大谷探検隊」と呼称されるアジア各地における一連の調査事業を開始している。すなわち、1902(明治35)年からの第1次、1908(明治41)年から1909(明治42)年までの第2次、1910(明治43)年から1914(大正3)年までの第3次にわたる、

中央アジア、インド、中国における調査である。注目すべきは、これらの事業が最盛期を迎えたとも言うべき第2次隊の活動時と時期を同じくして、次の目標としてチベットへ照準が合わせられつつあったことである(*.x.)。その結果、中国の仏教の聖地五台山において、浄土真宗本願寺派とダライ・ラマとの接触が実現することとなった。

ダライ・ラマ13世(1876~1933)は1904年から1909年まで、チベットを出て中国内地に滞在していた。大谷光瑞は1908(明治41)年、五台山のダライ・ラマのもとへ連枝尊由(1886~1939)を派遣し会見させたのである(*.xi.)。これによって、両者間の留学生交換が決定されチベットからツァワ・ティトゥル(1880~1957)(.xii.)らが、そして日本からは、青木文教(1886~1956)(.xiii.)、多田等観の2人が、それぞれ派遣されることとなった。その一方でダライ・ラマもしくはその周辺の高位のラマによる日本訪問計画が取りざたされたが実現しなかった。この五台山での会談は、日本仏教がダライ・ラマといわば公式に接触した最初の例であり、また、ダライ・ラマ来日計画をめぐる動きは、外務省・陸軍が、

それまで「喇嘛教」との接点であった仏教者と具体的な協力関係を持ったその嚆矢であったと考えられる。

これらダライ・ラマをめぐる、一連の動きにおいて当事者間を奔走したのが、寺本婉雅であった。彼は1905（明治38）年に、念願のラサに入るが、その後も北京のチベット仏教寺院雍和宮、および青海のクンブム寺（塔爾寺）を主な拠点として、仏教研究を継続していた。雍和宮は北京で最も格式のあるチベット仏教寺院であり、清朝中枢に近い。また、クンブム寺は中

国国内においてダライ・ラマ、パンチェン・ラマが滞在先の一つとする名刹である。寺本はこの2か所を中心に、チベット、中国、日本の各方面に広く人脈を持つことができた。その結果、中国側としては西太后（1835～1908）

主要人物の来日招請史

1901（明治34）年	阿嘉呼図克図来日
1908（明治41）年	ダライ・ラマ招請計画具体化
1932（昭和7）年	パンチェン・ラマ招請計画具体化
1942（昭和17）年	雍和宮活仏丹巴達扎来日

※この前後から満洲、蒙疆各地で「ラマ日本見学団」が頻繁に組まれる。

や醇親王（1883～1951）、肅親王（1886～1922）をはじめとする現地の有力者、「喇嘛教」側としてはダライ・ラマ13世および北京チベット仏教界の高僧から現場の実務を担う幹部僧まで、そして日本側関係者としては、福島安正（1852～1919）や小村寿太郎（1855～1911）、大隈重信（1838～1922）、川島浪速（1865～1949）等、軍人・外交官から民間人までを含む様々な人々を結ぶ人的ネットワークが寺本を結び目として形成された（*xi）。五台山での会談およびダライ・ラマ来日計画具体化は、以上のような寺本が持ったこの幅広い人的連絡の延長線上にこそ実現し得たものと言える。宗派を代表するに等しい高位の僧侶が、チベット仏教でも最高位に近い宗教的權威を持つ人物と接触したという点で、1908（明治41）年の五台山における大谷尊由とダライ・ラマの会談が第1の画期であったとすれば、第2のそれは、1932（昭和7）年、北京における、高山座主代理田中清純（1876～1941）と、パンチェン・ラマ9世（1883～1937）との会見であった（*xii）。パンチェン・ラマ9世は、1923年から1937年までチベットを出て中国に

滞在している。田中は1932（昭和7）年「中日密教研究会」発足にあたって大陸に派遣され、北京においてパンチェン・ラマ9世と親交を結ぶこととなった。田中の帰国後も両者の間に通信のやりとりがあり、パンチェン・ラマの来日計画まで取りざたされるようになる。しかしその後、パンチェン・ラマ9世が1937（昭和12）年、田中が1941（昭和16）年と、相次いで没したために、関係が大きく展開することはなかった。

4、戦時下の「喇嘛教」工作

明治以降のメディア上で「喇嘛教」が言及されるのは、その大部分がチベット事情紹介の記述中においてであった。しかし大正期に入ると「喇嘛教」は、モンゴルの宗教として扱われていくこととなった。すなわち、中国に対していわゆる21か条の要求が提出された際には、その焦点の一つであった「東蒙古」事情特集の中で、満洲事変以降は「満蒙」事情特集の中で、そして太平洋戦争開戦後は「西北」事情特集の中で、現地においてモンゴル系の住民たちに非常に大きな影響力を持つ存在として語られていくこととなった。その勢力下にあると言及される地域が広

がるにしたがって、「喇嘛教」は「大陸」の内部の広大な領域を一つのまとまりの中に含みうる、広がりもしくは寛容性を具えたキーワードとして認識され続けていったと言えるだろう。そのため、昭和戦時期の日本を中心として再編成された「大東亜」世界、外側への拡張性を強く持つこの世界認識を、基礎的に支えるものの1つとなったと考えられる。

これら「喇嘛教」圏下の広大な地域に住む人々を日本側に取り込むことは、ソ連の勢力に対抗する有効な手段の一つと考えられていた。そのため、日本側の各機関、すなわち日本陸軍や外務省、日本仏教各派や善隣協会などの民間団体が様々な活動を行った。満洲国や蒙古連合自治政府も、現地行政の一環として対「喇嘛教」施策を実施していた(*xvi)。

寺本自身は1909(明治42)年の帰国以降、1940(昭和15)年に没するまで、大陸に長期滞在することはなかったが、特に満洲国の対「喇嘛教」諸施策において、彼が果たした役割は小さくない。例えば対ソ連の最前線であった同国興安北省において、行政側で実務を担当する省公署職員、およびそれについて密接な協力関係にあった日本陸軍の現地特務機関の情報将校や現地のチベット仏教



晩年の寺本婉雅

有力寺院留学中の日本人僧はいずれも、寺本に師事した人物であった(*xvii)。

このように人材の育成と送り出しに関わる他、彼は仏教による「日滿蒙提携」(『黙働日誌』1937年12月28日)を実現するべく、著述活動を続けていた。それは第一に関係各所へ度々提出されている意見書類であり、第二に大陸で現地の人々へ配布することを目的として執筆・刊行された小冊子・パンフレット類であった(*xviii)。前者の提出にしる、後者の配布にしる、その窓口となったのは、陸軍大将松井石根(1878~1948)、海軍中将小笠原長生(1867~1958)といった、寺本旧知の人物であった。このことには大陸での活動を通して彼が得た人脈が、帰国後30年を経過してなおその機能を失っていなかった一端を見取ることができるだろう。

5、おわりに

— 仏教者としての寺本婉雅

筆者は、彼の「大陸」経験の最も顕著な特徴は、彼が持った人脈の突出した広さとその質にあると考えるが、このような人脈は、仏教者としての真摯な態度によって得た人々からの信頼があったからこそ、形成されたものと推測される。彼の記録の処々に残る著名人の名は、往々にして寺本に如才なさがあった結果のように語られることがあるが(*xix)、そうではないと筆者は考える。例えば、1902(明治35)年の北京滞在時の日記「第二回西藏探検日誌」に、儒学者として名高い呉汝倫(1840~1903)のような人物が、寺本の法話の熱心な聞き手として登場する(1902年2月14日、3月5日付)ことも、寺本が仏教者として得ていた信頼のそのありようの一端を示すものであると言える。また、上海事変当時上海領事館に勤務していた林出賢次郎(1882~1970)(*xx)が、市内の惨状に打ちのめされている自身の心情を寺本に訴える書簡が、寺本家資料中にある。そこで林出は「日支親善」の大切さ、そしてそれが武力によっては

到底成立し得ないことを繰り返し、そのために自分は力を尽くしたい今生で実現できなければ来世も来々世においても努力を続ける覚悟である、そのために「今後も御示教御指導」をお願いすると結んでいる。この記述から強く印象づけられるのは、従来寺本がそのプロパーのように語られてきた、チベットが関わる政治問題などとは全く別のところで寺本を必要とする人々が存在したことである。すでに寺本没後のことになるが、宮内庁に出仕していた林出が1948（昭和23）年職を辞してそれ以降、読経と写経の日々を送ったことには、この寺本の「仏教者」としての存在の反映があるのではないかと思われる。

『蔵蒙旅日記』、および新出資料中の4冊の日記の大部分において記述されていくのは、このように、モンゴルやチベットの厳しい旅中であれ京都の家であれ、日々仏典を読み研究し求められては法要をつとめ説法をする寺本の姿である。大谷大学の同僚であり寺本とは

家族ぐるみの親交があった仏教学者山口益（1895～1976）は、寺本に「求道者」としての姿があると書いている（山口益「序文」『蔵蒙度日記』、頁番号なし）。現在までの諸記述において寺本のそのような仏教の修道者という面は、チベット問題に深く関わった寺本という人物像と比較すると、これまで全くといっていいほど注目されずにきた。しかし、それを検討しないままでは、彼の活動の意味を読み誤ることになりはしないだろうか。筆者は寺本の「大陸」経験を象徴する



海闊天空

もの、京都の寺本家において「常に書齋に掲げられていた」（『蔵蒙旅日記』巻頭口絵、頁番号なし、写真番号③）という醇親王によって送られた額「海闊天空」に見る。そして、この「海闊天空」の語が仏教実践によって到達する理想的境地を意味する言葉として、寺本の教えを受けた富山県城端町の民間団体「黙働会」の人々の記述に頻繁に現れる（*XXI）ことに筆者は注目する。帰国後30年

を経て彼は、大陸経験の精華を、自身の信念の中核、目指すべき理想として持ち続けていたのである。京都の書齋でこの「海闊天空」を仰ぎつつ、その空と海の向こうに彼は、はるかな大陸を見続けていたのではないだろうか。そして身を日本に置きながらなお、このように「大陸」と繋がって生きるというその有りようは、海を隔てて大陸を望む日本人の生き方の、ひとつの典型を示すものではないかと筆者は考える。

（2014年12月5日・公開フォーラム）

* 寺本の大陸での活動に関する主な先行研究としては以下がある。山口瑞鳳「入蔵した日本人」（『チベット』上巻、東京大学出版会、1987年、61～91頁、特に65～67、81～91頁）、金子民雄「解説」（『寺本婉雅著作選集』第4巻、うしお書店、2005年、1～18頁）、前掲白須浄真「1908（明治41）年の清国五台山における一会談とその波紋―外交記録から見る外務省の対チベット施策と大谷探検隊―」、前掲篠原昌人「明治時代の対チベット接近策―福島安止、寺本婉雅を中心に―」、奥山直司「河口慧海日記・蔵蒙旅日記」（武内房司編『日記に読む近代日本』

5、吉川弘文館、2012年、134頁（161頁、特に152～161頁）。以上が、主に『藏蒙旅日記』を主資料とし、それに外交史料等を併用してなされた考察であったとすれば、新出の大谷大学所管資料の整理分析成果としては、三宅伸一郎「日本人初の入蔵者・寺本婉雅に関する新出資料について」『大谷学報』第87巻第2号、2008年、41～44頁）、高本康子「大陸における対「喇嘛教」活動―寺本婉雅を中心に―」『論集』第39号、2012年、93～106頁）、同「寺本婉雅の大陸人脈―大谷大学所管資料を中心に―」『印度学仏教学研究』第63巻、2014年、528～532頁）、同「寺本婉雅関連資料の現在―寺本家資料を中心に―」『論集』第41号、印度学仏教学会、2015年予定）、同「海闊天空―「五台山」以後の寺本婉雅―」『白須浄真先生退官記念論文集』勉誠出版、2015年予定）がある。

*ⁱⁱ: これについては、前掲三宅「日本人初の入蔵者・寺本婉雅に関する新出資料について」に詳しい。

*ⁱⁱⁱ: これについては前掲高本「寺本婉雅関連資料の現在―寺本家資料を中心に―」に詳述した。

*^{iv}: この詳細は高本康子「明治期の日本仏教における「喇嘛教」情報受容に関する一考察」『印度学仏教学研究』第57巻、2008年、555～558頁）に述べた。

*^v: 「入蔵熱」について言及は少ないが、河口慧海について精査したチベット学者奥山直司の『評伝河口慧海』（中央公論新社、2003年）が最も詳細である。

*^{vi}: その典型的な記述は「入蔵熱」グループの拠点の一つであった西本願寺普通教校「反省会」機関誌『反省雜誌』の、1893年3月27日発行号社説「仏門の福島中佐」である。

*^{vii}: これについては、高本康子「明治仏教とチベット」『近代仏教』第17号、2010年、18～38頁）に詳述した。

*^{viii}: 能海に関しては主に、『能海寛著作集』（第1～15巻、別巻、USS出版、2005～2010年）、能海寛研究会機関誌『石峰』第1～18号（1995～2013年）、隅田正三『チベット探検の先駆者求道の師「能海寛」』（波佐文化協会、1989年、改訂版2010年）を参照した。

*^{ix}: 多田の履歴については主に以下に依拠した。多田明子・山口瑞鳳編『多

田等観』（春秋社、2005年）、花巻市博物館学芸員寺澤尚の諸論文（2006～2011年同館発行『花巻市博物館研究紀要』所載）、高本康子『チベット学問僧として生きた日本人』（芙蓉書房出版、2011年）。

*^x: これについては、白須浄真「大谷探検隊とチベット、その研究の展望」『チベットの芸術と文化・その現在と未来』国際チベット研究シンポジウムITSS 2002論文集』広島市立大学、2002年、29～36頁）、および高本康子「大谷光瑞とチベット」（柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア』勉誠出版、2010年、225～247頁）に詳しい。

*^{xi}: これについては、白須浄真「外務本省に提出された西蔵問題に関わる一報告書―1912（明治45）年ママ（ママ）2月13日、西本願寺が提出した報告書の紹介とその解説―」（『大谷光瑞と国際政治社会』勉誠出版、2011年、263～297頁）に詳しい。

*^{xii}: ツァワ・ティトゥルは、名門出身の高位転生ラマであり、学僧としても最上級の栄誉を得た人物で、しかもダライ・ラマ13世の側近であった（前掲多田・山口編『多田等観』、20～21頁）。

*^{xiii}: 青木の履歴に関しては主に以下に

依拠した。長野泰彦編『国立民族学博物館研究報告別冊』1号(国立民族学博物館、1983年)、高本康子『ラサ憧憬』(芙蓉書房出版、2013年)。

xix* これについては、前掲高本康子「寺本婉雅の大陸人脈―大谷大学所管資料を中心に―」に詳述した。

xx* この会見およびその後の真言宗とパンチェン・ラマの交流に関しては、別稿「真言宗と「喇嘛教」―田中清純の活動を中心に―」(『群馬大学国際教育・研究センター紀要』第11号、2012年、15〜28頁、群馬大学国際教育・研究センター)に述べた。

xli* 日本人の対「喇嘛教」活動とその先行研究に関しては、高本康子「戦時期満洲国における「時輪金剛仏曼陀羅廟」建立について」(『密教文化』229号、2013年、99〜116頁)に述べた。

xlii* 興安北省公署における「喇嘛教」施策の実務担当者が横地祥原であり、大谷大学卒業後、寺本の推薦で同省公署文教科に勤務、シベリア抑留を経て帰国後はチベット研究に従事した(横地祥原「石崎東国先生―わが弱年の思い出―」(『大塩研究』第36号、1995年、12〜26頁、矢野光二「書評

『蔵蒙旅日記』』『外交時報』1112号、1974年、45頁)。また、現地の特務機関に所属し、横地らと密接な連携をとった情報将校が矢野光二であり、いわゆる「蒙古通」の一人とされる人物である。1941年ハイラル特務機関に配属され、43年まで勤務した(矢野光二「蒙古と私」1977年10月付)。また、現地の名利、甘珠爾廟

および葛根廟には、水谷湛、加藤清也が留学しており、彼らはいずれも、寺本にチベット語の手ほどきを受けた経陽社、1974年、『続ラマ僧十年』(南明社、1975年)。彼らの活動については前掲高本「戦時期満洲国における「時輪金剛仏曼陀羅廟」建立について」、および前掲「海闊天空―五台山」以後の寺本婉雅―」に述べた。

xviii* これらのパンフレット現物は残っていないが、最晩年の日記には例えば、「支那事変之際与蔵蒙仏教徒之書」(1938年7月19日)、「日華全仏教徒提携親善書」(1939年8月27日)などの書名が見える。

xix* 例えば、日本人チベット行百年記念フォーラム実行委員会編『チベットと日本の百年』(新宿書房、2003

年、63頁)。

xx* 林出の履歴については主に以下を参照した。勝木言一郎「林出賢次郎と波多野養作による西域調査」(『アジア遊学』32号、勉誠出版、2001年、43〜52頁)、中田整一「林出賢次郎―皇帝溥儀の通訳が見た満洲国―」(『をちこち』第9号、国際交流基金、2006年、15〜17頁)。

xxi* 例えば寺本婉雅編輯『黙働之光』(丁字屋書店、1937年)、8、44頁等がある。

講師略歴(こうもと やすこ)

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員(日本近代史・比較文化論)

東北大学大学院修了 博士(国際文化)
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター講師 群馬大学を経て現職

日本近代史、比較文化論の立場からの「チベット」と日本人の関係史を研究テーマとしている

著書 『ラサ憧憬』(2013芙蓉書房)、
『チベット学問僧として生きた日本人―多田等観の生涯』(2012芙蓉書房)、
『近代日本におけるチベット像の形成と展開』(2010芙蓉書房)